

持続可能な環境を実現するまちづくり

～第2回／自然環境に寄り添う経済～

菱川 貞義

(NPO 法人いのちの里京都村理事)
(浄土真宗本願寺派総合研究所委託研究員)

■ お金による時間の搾取が 共同体や地球環境を破壊 する

前回は「環境問題の解決を可能にする新しい共同体」について論じましたが、今回は共同体を弱めている力と私たちが向かうべき方向について考えてみます。

私は、環境問題や集落の問題と向き合ってきた、人間を混乱させているものは「お金の仕組み」であると確信しています。この混乱を解消するためには、お金の仕組みの何が問題なのかを理解し、私たちの行動にどのような影響を与えているのかに気づき、私たちが変わる必要があるでしょう。

農村に行くと、「お金よりも家族よりもいちばん大切なものは講（小さなコミュニティ）です」と話される住民と何度か出会います。仕事のこと、子ども教育のこと、将来のこと、葬式のこと、災害に遭ったときも、講があれば心配はない、といいます。このように

共同体がしっかりしている集落の住民は、あまり未来のためにお金を貯めようとは考えていません。年収を増やしたいなど経済面での成長にもそれほどとらわれることがありません。日々の暮らしがうまくまわっていれば十分なのです。お金より共同体を大切にしているのは地域（自然を含めた共同体）に依存している暮らしです。こうした人たちの仕事ぶりはといえば、農家や加工所で働く人は、食べる人を想いながらつくり、大工や鍛冶職人は、使う人を想いながらつくり、手間を惜しみません。食べる人や使う人が気づかないようなところも手を抜きません。大量につくろうとも思いません。共同体のなかでは信用こそが財産であることを体が知っています。

一方、共同体よりもお金を大切にしていく人はどうでしょう。これは私たちの今の暮らしぶりかもしれません。仕事のこと、子どもの教育のこと、老後のことも、葬式のこと、事故や災害に遭ったときさえ、人には頼りません。全て売られているサービスで解決し

なければならぬので、とにかくお金が必要になります。未来のことは全てお金が決定している、といえるのかもしれない。そのため、年取などの経済的成長は絶対的な条件となります。将来のために、その日の暮らしや他人との交流を控えてつづける暮らしです。こうした人たちは働く上でも、基本的には目の前のことを重視します。時間あたりの作業効率のために、必要のない部分はどうしても労力を惜しまざるを得ません。とにかく大量につくり、ため込み、売ることを考えます。究極的には信用よりもお金を取らざるを得ないところまで追い込まれてしまいます。

もしも、お金という存在がなかったら、将来のために時間を使って貯め込んでおくようなことはできません。たとえ大量の食品をつくり、貯め込んだとしてもすぐに劣化してしまうからです。そうすると食べるのに必要なだけの仕事をし、余った時間を、今、他の何かのために使うことが求められるでしょう。その使い道が現在の自分の所属している共同体

を豊かにすることでした。なぜなら、自然環境や人々との共生関係があつてはじめて仕事や生活が成立することに疑いがないからです。

現代社会は多くの地域の共同体が急速に弱体化していますが、それはお金の依存した生活の人の割合が増え、共同体のために時間を使う人が少なくなったからです。その意味では、お金が共同体を解体している、といえるかもしれません。

また、お金の依存した生活が行き着く先は、コストカットであり、時間の搾取です。大金の移動が可能になり、貸し借りが容易になった世界では、より多くのお金を借りて、より生産能力の高い設備を整えた者が、市場で商品を安く、大量に売ることができます。他者が新しい設備で追いついてくれば、さらに高い生産能力を求めて借金を重ねます。この多額の借金を返すために行きつくのがコストカットです。

素材や部品代をできる限り押さえ、消費者に見えない部分も徹底的にカット。そして人件費も抑えるべきでしょう。人

件費を抑える、ということとは、働く人間の時間を買叩く、ということ。働く人は食べていくためのお金を稼ぐために、より多くの時間を売らねばなりません。これが時間の搾取です。

さらにこの時間の搾取の範囲は、地球環境にも及びます。例えば石油や天然ガスなどの化石燃料は地球が数億年かけてつくりあげたものですが、これを採掘するとき、私たちは地球そのものに何も対価を払っていません。採掘することや、精製する人間の労力には価値を認めますが、それをつくりだした地球環境には何の補償もしていません。水や鉱物も同じです。搾取するだけ搾取して、それをつくりだす地球環境には何の補填もしていないために、地球環境問題が引き起こされています。

お金は所持することに限界がありません。いくらでも持ててしまえます。そして地球上にいくらでも存在できてしまいます。食料のように劣化することもありません。電子データとなった今、それはますます加速しているでしょう。持ちき

れない、ということがなく、悪くなる前に使い切れない、という限界もありません。つまり、いくら持っても、もうこれ以上必要がない、という状態は（少なくとも物理的には）訪れないということですね。このお金の性質は、持てるならばいくらでも持とうとしてしまう私たちの性質とあいまって、私たちを「足りている」「もうこれ以上必要ない」という気持ちにさせず、いつまでも「足りない」気持ちにさせ続けます。そのため、私たちはお金に依存する限り、未来に対する不安からお金を稼ぐことばかり時間を使い、共同体を放置して解体しつづけ、いくらでも環境に負荷を与えて搾取を続けてしまうという負のサイクルの中にいるのです。

■ お金との付き合い方を 見直すことがまちづくり

お金の問題は複雑ですが、その問題のはじまりは、お金の「劣化しない・無限に増やせる」という特徴に目をつけた者

たちが、お金そのものを商品化してしまっただことにあるでしょう。

『エンデの遺言』根源からお金を問うこと』(NHK出版)にはお金のことを理解できる手がかりがあります。社会問題に立ち向かった児童文学作家で『モモ』や『はてしない物語』等有名な、ミヒヤエル・エンデ(1929~1995)の問題意識が綴られています。

エンデはラストインタビューで、「重要なポイントは、例えばパン屋でパンを買う購入代金としてのお金と、株式取引所で使われる資本としてのお金は、二つの異なった種類のお金であるという認識です」と語っています。

エンデは、お金にはいくつもの異なった機能が与えられ、それが互いに矛盾して問題をおこしているといえます。第一にお金にはモノや労働をやりとりする交換手段としての機能ががあります。第二にお金は、財産や資産の機能ももっています。このお金は貯め込まれ、流通しないお金

です。さらにお金には、銀行や株式市場を通じてやりとりされる資本の機能も与えられています。そこではお金そのものが商品となり投機の対象となります。いくらでも印刷できる紙幣、さらにはコンピュータ上を飛び交う数字となったお金は、実体のないままに世界を駆け巡っています。現代の通貨は、まったく違う機能を、同時にもたされているのです。それが日々変動しながら世界を駆け巡り、生活や生産の場を混乱させているというのです。^{*1}

これによれば、お金の一番目の機能は「交換機能」であり、サービスとモノの流通を手助けするための潤滑油のようなものです。これにより社会に存在するサービスとモノは社会の中をスムーズに移動します。このお金が交換に使われれば使われるほど市場は活発化し、様々なモノとサービスは必要な人の元に届きやすくなります。

第二の機能は「財産や資産」であり、いくらでも手元にとどめておけるとい

う、一番目の機能と矛盾するものです。現代社会では交換は基本的にお金を媒介として行われます。つまり、このお金を手元に貯め込むことは、社会におけるモノやサービスのスムーズな移動を阻害することに等しいのです。このほかに、第二の機能の派生としてお金そのものをお金でやりとりする「資本」としての機能もあり、これによってお金はモノやサービスではなく、お金そのもののために使われていくこととなります。つまり、社会を豊かにするはずであったお金は、この第二の機能を持つてしまったことで社会を混乱させている、ということになります。

一番簡単なまちづくりは、このお金の仕組みを中立・公平に戻し、本来の目的どおりに、お金をモノや労働から生まれる商品やサービスとの交換でしか使えないようにすることでしょう。これを実現するためには、他のモノやサービスと同じようにお金も時間が経てば減価する仕組みにして、貯め込めないようにするか、お金の商品価値をもたらしような金

融商品の類をすべて禁止にします。しかし、それは既得権益の問題で、ほとんど不可能でしょう。

そこで、お金とうまく付き合っていく方法を考えます。旅行や車や携帯電話のようなものにはお金を使いますが、基本的な生活においてはなるべく地域内でサービスやモノが循環する流れをつくるように、お金を補完する仕組みを集落ごとに集落の特色や事情に合わせてつくります。そのための道具のひとつが地域通貨です。

地域通貨は、割引券や金券配布のような機能で留まっているものも多いですが、本来は地域社会の中で、生産・流通・消費に代表されるサービスやモノの流通、つまり経済を媒介し、人から人へ渡りながら必ず発行元に戻るといって、まさしく先に述べた通貨の第一の役割を代替するものです。

この本来の地域通貨の代表例として、『エンデの遺言』の中でオーストリア・チロル州・ヴェルグルの地域通貨「労働証明書」が紹介されています。1922

年にはじまった世界恐慌はオーストリアの地方都市にも深刻な不況をもたらし、お金はどこかに貯め置かれました。お金が循環しなくなり失業者は爆発的に増え、生産は減り、消費も落ち込んでいきました。そして1932年になって、ヴェルグルだけで通用する地域通貨が発行されました。この地域通貨の特色は1カ月に1%ずつ価値が減っていく仕組みの、老化するお金です。実際に「労働証明書」は貯め込まれることなく地域内をものすごいスピードで流通し続け、1年足らずで失業率はほぼ0%になりました。しかし地域通貨を脅威に感じたオーストリア政府が管轄する中央銀行が裁判をおこし「労働証明書」を禁止すると、すぐにまた失業者で溢れかえってしまいました^{*2}。

「お金の仕組み」に真つ向から取り組み大成功した歴史的大実験でしたが、やはり、真正面から立ち向かうのではなく、しなやかに、日々の暮らしを楽しみながらやわらかく立ち向かうほうがいいのかもしれません。

■まわりに寄り添う

今日の主流の経済にとつて、地球資源は無制限でないと都合がよくありません。無制限であるからこそ無料で使っているものがめられずにいます。私たちは地球資源には限りがあることは知っているのですが、未来の進歩した技術や新たな発見によつてなんとかなると思ひ込んでいます。そして、いよいよ資源が枯渇するよくなことになれば、地球の外の資源をとつてくればよいと考えて研究や開発をしている人たちもいますが、そのためにはますますお金が必要になるでしょう。現在は「誰かがやってくれる」「未来になつたら何とかなる」と信じながら、借金を重ね、地球をないがしろにしてお金への依存度を高め続けている、という状況です。ついに、自分で借りたお金を自分で返すことも放棄し、保全できなかった地球と返せなくなった借金を子どもや孫やそのあとに続く未来の人間に押し付けています。これが成長を基本路線とし

た現代社会の姿です。本当に、これいいのでしょうか。

未来に借金をさせてまで成長しようとする現代社会のなかで、いま、私たちがやらなければならぬことは、表層の問題への対応ではなく、私たち自身が変わり、根源の問題であるお金への依存度を下げること。そしてそのために、まわりの自然環境に寄り添うことです。

例えば、お米は田んぼで稲を育てることとで手にできます。稲に適していない土地は、麦か蕎麦か芋か何かが適しているでしょう。育ち方は土地により差があります。その土地の地力に合わせて苗を植える間隔を決めます。収量を増やしたいからと密植にすると問題をおこします。稲1本1本が受けられるエネルギーが減るうえに、日光も十分に受けとれず、風通しもわるく、体が弱くなり虫に食べられたり病気になつたりする稲が増え、結果としてかえって収量が落ちてしまいます。土地に合った収量を守っていれば、毎年変わることなく実りを手にすることができます。

またこの際、農業や肥料を外から持ち込む必要もありません。農業は作物が虫によつて食べられることを防ぎますが、そのほとんどは大地に浸透し、土や水を汚染しますし、肥料は結果的に稲を脆弱にしてしまいます。

その土地に育つことができる草木にとつては、そこに居るだけです。足りているのです。「毎年、稲刈りしてお米を食べていたら土の中の栄養がなくなるから、肥料は必要だ」と思われるかもしれませんが、自然界はすべてのものが巡っています。大地から育つ実りをエネルギーとして活用している人間を含めた動植物は、排泄物を出し、やがて亡骸となります。これが大地の新しい肥料分となります。排泄物も田畑の中に施す必要はありません。どこかにあれば、やがて巡ってきます。それに、草木は土から栄養をとるだけでなく、太陽からも空気からもエネルギーを取り入れています。農薬も肥料も外から何も持ち込まなくていいのです。

こうして「外から何かを持ち込むこと

なく育った」作物を基準に生活を組み立てると、循環する持続可能な社会の枠組みが見えてきます。こうした社会こそが「足りている」精神性に基づいた社会であり、こうした暮らしにどれほど近づけることができるかが、今の私たちの生活に問われていることといえるでしょう。

「足りない」発想の経済と、私たちの暮らしが急激に世の中を変えてしまった今、お金との関係性、いのちとの関係性を建て直し「足りている」ことを思い知り、まわりに寄り添い、成長するのではなく循環する持続可能な社会をつくるのは、今や厳しく大きな方向転換となってしまいました。

お金も人間が創り出したものです。お金が自然環境を含めた共同体への依存度を弱めているとすれば、人間がどこかでそのように望んでいるのかもしれない。まわりの人や自然に依存しなくなれば、「つながり」が大事だ、という感情は薄れ、不便さや災いの元として「つながり」をわずらわしく思う気持ちが強くなるでしょう。

今のお金の仕組みに頼らず「足りる」ことを実感できる持続可能な社会をどうやってつくるかは大きな課題でしょう。少なくとも私たちが変わらないままでは、それはほぼ不可能なことといえます。仏教には「少欲知足」という教えがあります。このままお金に時間を搾取され続けて、地球を搾取し続ける生活は

仏教的といえるのでしょうか。「足りない」心は、まさしく人類の煩惱のあらわれです。その人類の煩惱が、お金の仕組みを使って地球環境を持続不可能にしようとしている今、お寺が地域にできることは何でしょうか。私たちはもう一度足元から社会を見直すことを問われているのかもしれない。

*1 河邑厚德、グループ現代『エンデの遺言』根源からお金を問うこと』NHK出版、2000、55～56頁参照

*2 河邑厚德、グループ現代『エンデの遺言』根源からお金を問うこと』NHK出版、2000、143～152頁参照

菱川貞義（ひしかわ・さだよし）

講演社こども美術学園講師、印刷会社、デザインプロダクションを経て、1989年に広告会社（株）大広に入社。デザイン、コピー、プロモーション、プランニングの仕事をするが、地球環境プロジェクトチームとして滋賀県・NTT共同プロジェクトに参画し、「市民参加型情報ネットワーク」の社会実験「びわこ市民研究所」を運営。

2006年から環境に負荷をかける自然農を実践。

2008年には「25研究所」を社内ベンチャー組織として立ち上げ所長に就任。

2012年に農村再生をミッションとするNPO法人いのちの里京都村を設立。

2014年からは浄土真宗本願寺派総合研究所の他力本願netのプロジェクトに参加、委託研究員として「1000年続く地域づくり」をテーマに、まちづくり、セミナー、ワークショップ等を行う。